

玉那覇文彦さん

1928(昭和3)年生まれ
当時の本籍地 沖縄県
陸軍
所属 一中鉄血勤皇隊

戦地 西原町、糸満市字伊原



●1945(昭和20)年3月、鉄血勤皇隊に召集

生まれは那覇の西原町。当時は沖縄県立第一中学校(現在の首里高校)の4年生だった。鉄血勤皇隊が組織されて、3月頃に召集。全部の中学で全部軍に協力するのは決まっていた。1、2年生も通信隊として協力していた。

●対戦車攻撃班に配備される

私は爆薬を背中に背負って体当たりをする対戦車攻撃班に配備された。「これは大変だ。最初に戦死するのは免れない」と思った。19歳だった私はその前に親に会いたいという気持ちが強くなった。それで自分の同僚とか先輩とかと一緒に一時勤皇隊から逃げ出した。もちろん帰ってくるつもりだった。

●両親に会いに国頭村へ。米軍の上陸を知る

親はその時子供たちを連れて山原(やんばる)の国頭村の方に避難していた。親とは面会できた。「これで思い残す事ない」と思い国頭から引き返して自分の部隊に帰る途中、4月1日に、石川の東恩納で敵の上陸を知った。そこからは憲兵が立っていて人を通さない。「危ないから山原に行きなさい」と止められた。自分たちは鉄血勤皇隊の腕章をして胸章があったので部隊に帰るのであればと言って通してくれた。

●西原に戻り、兄の安否を確認。西原に猛烈な爆撃

父から、兄の安否を確認してから一中に行くように言われていた。兄の両足は義足で、そのため役所に勤めることが出来た。兄はサイパン玉砕からも生き延び、沖縄に引き揚げて来た運の強い人。西原の役所の壕で兄と弟と合流できた。これは幸いだった。弟は16歳で鉄血勤皇隊だったが若いからと学校から帰されていた。

山原から帰って4、5日してからだと思うが、西原役所の周辺が日本の対空砲の陣地になっていた。それをアメリカに感づかれて猛烈な砲爆撃を受けた。もう西原の壕に居ることができなくなり、同じ部落の先輩の壕にお世話になった。その壕も爆撃を受けてつぶされた。兄が生き埋めになり皆で掘り出した。私は腰をやられ高熱で動けなかった。その翌朝、2キロほど先の棚原という部落まで敵が迫って来ていると聞いて熱が下がった。兄は義足をやられていたので一中に行くことを諦め、私が兄を背負い、弟が食料探しをして島尻に避難した。

●1945(昭和20)年6月22、23日頃、戦車砲の攻撃を受けて自決を覚悟する

それから約2ヶ月、現在のひめゆりの塔のあるところの裏側の民家のお墓に避難していた。中には親子3名、我々兄弟3名、僕のいとこ、ナカヤマサダマサという二中の生徒の8名。傷ついた日本軍の兵隊が2、3人いて、その人たちは傷ついているから僕らは壕から出て行けとは言えなくて一緒に座って居た。彼らとは会話はなかった。

6月22、3日と思うが、敵の戦車砲で攻撃されて怪我人も出て阿鼻叫喚。死ななくてはいけない。自決だなど。手榴弾を持っていたので皆と一緒に自殺しようと、「皆覚悟はいいか」と言って手榴弾の安全ピンを引こうとした。その時、兄たちがワーワーと外に出て行った。

最初にいとこが弾に撃たれながらハンカチを振って出て行った。ピタッと攻撃が止み、それから事態が変わった。アメリカ軍の「早く出なさい。早く出なければ壕を爆破する」と放送を聞いて、いつも背負われていた兄が這い出して女たちと一緒に先に出ていった。私は安全ピンを引き抜くのも忘れて手榴弾を壕の中に押し込んで、みんなを確認して最後に出た。敵の馬乗りにあって捕虜になった。

一度お墓に入って、お墓から出たのであの世から逆戻りした錯覚に捕らわれた。助かった。この一瞬をありとあらゆる地上の神に手を合わせた。これが僕らの本当の気持ちだ。これは経験した人にしかわからないと思う。

●これが私の気持ち

山原に親に会いに行こうと言いだした首謀者は僕。僕が下級生や同級生を誘った。一人で行動できなかった。同郷のナカイ君とかソケンとか4人に相談して。一緒に山原に親に会いにいった4人も亡くなり僕だけ生き残っている。消息は全然わからない。親に会ってから一中に帰ったのか、どこで亡くなったかわからない。首謀者の僕だけ生き残って他のみんなが亡くなった。自責の念に駆られ今も苦しんでいる。沖縄の戦争体験者がなぜ口をつぐんで今でもあまり話さないかというあの体験を思い出すのが辛いからです。だからその気持ちをわかってもらって、戦争は二度とやってははいけないということを切に希望します。これが私の気持ちです。(取材日:2013年2月2日)